

# 今日の歴史修整主義

——「ユダヤ難民救出」で進む樋口氏の偶像化

滝川義人

○ユダヤ難民救援で固まる樋口像  
最近の風潮を危惧して再度樋口氏を取り上げたい。

昨年10月11日、樋口季一郎氏の出身地淡路島で、伊弉諾神社の淡路祖霊社前に、同氏の銅像が建立された。12日付神戸新聞は、「ユダヤ難民救った旧軍人樋口季一郎氏、出身

の南あわじで銅像建立、除幕式に孫ら250人」と報じた。

宗教専門紙の中外日報は、数回にわたり、「ユダヤ難民救った軍人顕彰、境内の祖霊社前に銅像」と題し、「ユダヤ難民の保護は、1940年に杉原千蔵がリトアニアで発給した『命のビザ』が知られるが、樋口中将はその2年前、シベリア経由で『満

州国』に逃れてきた難民を、難色を示す政府を説得して受け入れた。一説には2万人が助かったという」と書いた。

新聞だけではない。NHKも「ユダヤ難民救った淡路島出身の樋口季一郎、勇気ある行動に光を」と題する特集を組み、10月26日夜に放映した。武人でありながら、人道的精神を発揮した樋口氏は郷土の誇りであり、その勇気ある行動を語り継ごうという内容である。

メディアが報じるニュースでも、美談なら素直に信じるのが、人情というものである。樋口氏が学んだ鳳鳴旧制中学（現篠山鳳鳴高校）のある丹波篠山市の酒井隆明市長は、10月14日付「市長日記」に、この学校が著名軍人を多数輩出していると前置きし、「その一人に樋口季一郎陸軍中将がおられ、淡路島のご出身です

が、鳳鳴に学ばれた……樋口さんは満州国においてナチスドイツの弾圧を逃れ、シベリア鉄道などでやってきたユダヤ人難民を受け入れて救出したことが知られるようになり……人道主義の軍人と高く評価されるようになりました」と書いた。

## ○鎌倉には記念碑

今年5月、今度は鎌倉市に顕彰碑が建立され、中将のユダヤ人難民救出は遂に永久不滅の事実として石に刻まれた。場所は円覚寺龍隠庵。刻まれたのは3つの功績、救国（昭和20年8月18日のソ連軍侵攻に対処した行為）、キスカ島救出作戦（昭和18年、米軍に包囲されたキスカ島の日本兵約5千人を救出）、そしてユダヤ難民の救済である。こちらは「昭和13年3月、ナチスドイツの迫害を逃れオトポール駅（シベリア鉄道）に到達したユダ

ヤ難民を、ハルビン特務機関長として救済した。この脱出路は『ヒグチ・ルート』と呼ばれ、その後も、多くの人命が救われた」とある。

建立にかかわった関係者の1人、清水剛元陸自二等陸佐は、「本来であれば、この席には陸上幕僚長・東部方面総監・第一師団長が参列しても何ら不思議ではありません。その位、日本国やイスラエル国に名を遺した偉大な將軍であります」と挨拶した。

ちなみに地元の神奈川新聞は、5月25日付で「鎌倉・龍隠庵樋口中将の顕彰碑完成——信念貫きユダヤ人救う、軍国主義の時代、人間性を忘れず」という記事を掲載している。

## ○研究者は救出劇を一切指摘せず

今年6月、ケンブリッジ大学出版局から『近代アジアのユダヤ人社

たきがわよしと●アラブ・イスラエル軍事紛争の研究者。イスラエル大使館前チーフインフォメーションオフィサー、中東報道研究機関（MEMRI）日本代表。ミルトス刊の著書に『日本型思考とイスラエル』、訳書に『深淵よりラビ・ラウ回想録』『甦りと記憶』『ケース・フォー・イスラエル』他多数。

会』（*Jewish Communities in Modern Asia*）と題する研究書が出版された。地域的には中央アジアからシベリア、ロシア極東部、中国と日本を含む東アジア、インド亜大陸から東南アジアへ至る地域を対象とする。多数の研究者がそれぞれ専門地域を分担している。中東北アフリカ、ヨーロッパ、ロシア、南北アメリカ、オーストラリアのユダヤ人社会に関しては、これまで沢山の研究書が出ているが、アジアを対象とする包括的研究の発刊は、今回が初めてである。日本語版が来年出版される。

東アジアの項では、ハルビンのユダヤ人共同体に一章が割かれている。担当はカナダのヨーク大の研究者で、東アジア史を専門にするヨシユア・フォーゲル教授である。『ハルビン市の沿革』、『ユダヤ人の信仰と共同体生活』、『日本の占領と反ユダヤ主義の抬頭』、『日本支配の全盛期と極東ユダヤ人会議』、『共同体の消滅』の項目で構成され、樋口氏の名前は数回出てくるが、そもそも「ユダヤ難民2万人救出のオトポール事件」の話など一切ない。

筆者は、早大の小林正之教授を中心に活動していた研究会（現日本ユダヤ学会）のメンバーたちと交流があり、日本支配下ハルビンのユダヤ人社会がよく話題になったが、2万人救助云々の話など全くなかった。当時これを唱えていたのは、作家相良俊輔作『流水の海』（1973）だ

けである。

比較的最近の研究では、同志社大一神教学際研究センターが出している一神教学際研究（JISMOR）10号（2013）掲載の高尾千津子（東京医科歯科大教養部）教授著『戦前日本のユダヤ認識とハルビンのユダヤ人共同体——日本支配下のハルビン・ユダヤ人共同体（1932—41）』（原文英語）がある。高尾氏は、ロシアのユダヤ人やホロコーストなどを専門にする日本の代表的な研究者の1人である。2万人救出など一大事件のはずであるが、全く指摘していない。

### ○ユダヤ人研究者の批判

樋口季一郎陸軍中将の行為にかかわる昨今の動きを憂慮して、『近代アジアのユダヤ人社会』の編著者であるハイファ大学の日本学研究者ロ

テム・コーネル教授と、ハルビンの項の執筆者ヨシユア・フォーゲル教授が連名で、批判の文書をまとめた。筆者は素案の段階で、その内容を読ませてもらったが、次のような内容である。

「問題は、この話がすべてフィクションであるということである。これは、樋口支持者の一部が主張する、単に数字が誇張されているということではなく、単純に「無かった」話なのである。樋口の許可待ちの列車に乗り合わせたと言言した人は、これまで1人もいない。同様に樋口がハルビンに勤務していた期間に、この難民の大群が陸路で到着したことを記した日本の文書もない。また、この話を裏づける他の史実もない。第一、ソ連は1940年代以前にユダヤ人難民が大量に自国領を横断す

ることを許可していない。第二に、中部ヨーロッパの難民が東アジアに向かうのは、ほとんどは水晶の夜事件（1938年11月8-9日）以降で、それも大半はイタリアから船で、特に上海に向かうのである。

樋口と違って、杉原千畝には彼の慈悲深さを証明する人が沢山いて、後年本当に多くの人が立ち上がって彼に感謝した。ドイツ軍がリトニアに侵攻する数カ月前に、彼が発給した通過ビザは、彼らのアジアへの出発に役立ち、結果的に彼らの生存を助けることになった（注・この難民

の組織化にあたったZ・バルハフティクは、1940年7月から独ソ戦直前の41年5月末までの11カ月間に4664人の難民がシベリア鉄道経由で日本へ来たと指摘）。

信じられないことに、この話の唯一の情報源は樋口自身なのである。

1970年に死去して間もなく出版された自伝で、戦前のユダヤ人とのやりとりについて一章を割き、1938年にユダヤ人のために行なった自身の行為についても、数頁を割いている。樋口の役割は極めて控え目なものであった。彼は、満州経由のユダヤ人の通過を容易にする仲介役を務めたに過ぎない。しかし数十年後、この小さい、そしてフィクション化を伴う話が、彼の信奉者たちによって、大きい救出劇の物語に膨らまされていく」

この批判の書は、表現をやわらげ、情報を追加した上で（但し主旨は変らない）、『疑わしい英雄的行為』（原題 Questionable heroism）と題し、

日本の外国特派員協会機関誌（2022年12月号）に掲載された。

事実に基づかぬことを付け加える

のは、樋口氏御本人の経歴を汚すだけである。ちなみに、日本ユダヤ学会は、2015年12月発行の機関誌「ユダヤ・イスラエル研究」で、「ユーラシア東部境界地域における『ユダヤ人問題』」と題する特集を組んだ。野村真理「満州—ロシア人・ユダヤ人・日本人の交錯」、鶴見太郎「ロシア・シオニズムの亡命—ハルビンにとどまったシオニスト」、中嶋毅「ロシア・ファシスト党とハルビンの反ユダヤ主義」の記事が掲載されている。最近の「ハルビン・樋口・2万救出」ブームをどう見ておられるのか、高尾氏を含め4氏に御意見を伺いたいものである。★



『日本型思考とイスラエル』  
滝川義人著 ミルトス  
1980円